

鏡のなかのイメージたち

—〈ハリー・ポッター〉に投げられた多作品の影—

Images in a Mirror: Reflections of Other Stories in *Harry Potter*

沢 辺 裕 子

はじめに

1997年から刊行が始まったJ・K・ローリング(J. K. Rowling, 1965-)の〈ハリー・ポッター〉シリーズは、最終巻第七巻が2007年夏に出版され、ついに物語が完結した。日本語訳も2008年の夏に最終巻までが出揃い、日本の子どもたちにも物語全体が手の届くものとなった。一歳で孤児になり親戚の家で育った主人公ハリーが、11歳の時に魔法使いであることを告げられて、ホグワーツ魔法魔術学校に入学する。このシリーズは、それからのハリーと仲間たちの七年間を追った物語だ。物語の舞台の大部分が英国のパブリック・スクールを思わせる寄宿学校に設定されていることから、トマス・ヒューズ(Thomas Hughes, 1822-96)の『トム・ブラウンの学校生活』(*Tom Brown's Schooldays*, 1857)が先駆けとなったイギリス児童文学の伝統のひとつ「学校物語」の系譜を継ぐものでもあるし、また魔法使いの学校が舞台ということから、アーシュラ・K・ル＝グウィン(Ursula K. Le Guin, 1929-)の〈ゲド戦記〉第一巻『影との戦い』(*A Wizard of Earthsea*, 1968)にも設定が似ていると言

える¹⁾。

しかしここでは、そのような大きな枠組みをとらえるのではなく、物語の随所に出て来る先行作品からの小さな影響をひとつずつ拾い上げてみたい。それはただの模倣ということではなく、過去の作者に対するオマージュであり、過去の作品のイメージへのアリュージョンであるだろう。オマージュやアリュージョンというものは、読者がそれに気づかないとしても、物語のプロットを追うことにはまったく差し障りがないのはもちろんであるが、それに気づくことによって、読者は今読んでいる作品の中に、過去の作品の場面を投影することができる。それによって、過去の作品の世界の断片が自分の手の中にある作品にも宿り、読んでいる物語世界の奥行きが深まることになるのだ。

例えば、ジェームズ・M・バリ (James M. Barrie, 1860-1937) の『ピーター・パン』 (*Peter Pan*, 1911) の第三章で、ネバーランドへと旅立つことを躊躇するダーリング家のウェンディをピーターが説得する時の言葉を見てみよう。

“I’ll teach you how to jump on the wind’s back, and then away we go.”

“Oo!” she exclaimed rapturously.

“Wendy, Wendy, when you are sleeping in your silly bed you might be flying about with me saying funny things to the stars.”

Peter Pan, Chap. 3 “Come Away, Come Away!”²⁾

風の背中に飛び乗るというこの言葉は、ジョージ・マクドナルド (George MacDonald, 1824-1905) の『北風のうしろの国』 (*At the Back of the North Wind*, 1871) の主人公ダイヤモンド少年が、髪長い女性の姿をした北風のうしろに乗って初めて空を飛ぶ時のイメージを借りているよ

うに思われる。北風が最初にダイヤモンド少年のもとに姿を現したのは夜の寝室であり、それはピーターがウェンディと出会うのが夜の子ども部屋ということにもつながっている。うしろに長い髪をたなびかせて夜空を飛ぶ北風のイメージを借りることで、『ピーター・パン』の中のこの小さな場面でも、誘惑の言葉にさらに力を持たせているのではないだろうか。

これと同じように、過去の作品のイメージが〈ハリー・ポッター〉シリーズの中のどんなところに投影されているのかを追ってみたい。影を投じている作品として、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』、ジェイムズ・M・バリの『ピーター・パン』、C・S・ルイスの〈ナルニア国物語〉、J・R・R・トールキンの〈指輪物語〉を取り上げてゆく。

1. 『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』の影

〈ハリー・ポッター〉の物語、特に第一巻『ハリー・ポッターと賢者の石』³⁾ (*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 1997) には、ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-98) のふたつの『アリス』の影響をあちらこちらに見ることができる。

物語の初めの方で、親戚のダーズリー家でバーノンおじさん、ペチュニアおばさん、そしていとこのダドリーにいじめられながら暮らしている主人公ハリーのもとに不思議な手紙が届き始める。そして封筒には家の住所だけではなく、ハリーの部屋が家の中のどこにあるかまでわかっているような宛先が書かれていた。

Mr H. Potter
The Cupboard under the Stairs
4 Privet Drive

Little Whinging

Surrey

Harry Potter and the Philosopher's Stone,
Chap. 3 “The Letters from No One”⁴⁾

この後、ハリーが階段の下の物置から一番小さな寝室に移されると、宛先は “Mr H. Potter, The Smallest Bedroom, 4 Privet Drive —” (p. 33) に、大量に届き続ける謎の手紙から逃れるためにバーノンおじさんが家族を連れて家を出た先では “Mr H. Potter, Room 17, Railview Hotel, Cokeworth” (p. 36) に、海に浮かぶ孤島の小屋に逃れても “Mr H. Potter, The Floor, Hut-on-the-Rock, The Sea” (Chap. 4 “The Keeper of the Keys,” p. 43) に次々と変わってゆく。

これらのユーモラスな宛先は、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』 (*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) で背が伸びてしまったアリスが、遠くに見える自分の足に宛ててクリスマス・カードを書く想像をしている場面を思い起こさせる。

Alice's Right Foot, Esq.

Hearthrug,

Near the Fender,

(with Alice's love).

Alice's Adventures in Wonderland,
Chap. 2 “The Pool of Tears”⁵⁾

ハリーが暮らしている「階段下の物置」という家の中の特殊な場所までが手紙の宛先に書かれていることは、アリスが自分の右足に宛てた「炉格子の近くの、炉辺の敷物」というへんてこりんな住所を思い出させ、

そのおかしさを倍増している。

自分が魔法使いであることを告げられた翌日、ハリーは迎えに来た大男ハグリッドと一緒にロンドンにある魔法のショッピング街「ダイアゴン横丁」を訪れる。最初に魔法の銀行グリンゴッツへ行き、ハリーの両親が残した財産を預かっている金庫の「小さな黄金の鍵」をハグリッドがポケットから取り出し、銀行を経営しているゴブリンに渡す。

“Morning,” said Hagrid to a free goblin. “We’ve come ter take some money outta Mr Harry Potter’s safe.”

“You have his key, sir?”

“Got it here somewhere,” said Hagrid and he started emptying his pockets on to the counter

“Got it,” said Hagrid at last, holding up a tiny golden key.

Harry Potter and the Philosopher’s Stone,
Chap. 5 “Diagon Alley” (p. 57)⁶⁾

『不思議の国のアリス』の冒頭で、アリスが白うさぎを追ってうさぎ穴から不思議の国へと入って行き、左右にドアの並ぶ廊下を歩き回った後で、ガラスのテーブルの上にある「小さな黄金の鍵」に気がつく。その鍵が同じ“a tiny golden key”という言葉だ。

Suddenly she came upon a little three-legged table, all made of solid glass; there was nothing on it except a tiny golden key, and Alice’s first thought was that it might belong to one of the doors of the hall; but, alas! either the locks were too large, or the key was too small, but at any rate it would not open any of them. However, on the second time round, she came upon a low curtain

she had not noticed before, and behind it was a little door about fifteen inches high: she tried the little golden key in the lock, and to her great delight it fitted!

Alice's Adventures in Wonderland,

Chap. 1 “Down the Rabbit Hole” (pp. 5-6)

その小さな黄金の鍵で開けた小さなドアの向こうに、アリスは今まで見たこともないような美しい庭を見る。その庭に行こうとこれからアリスの冒険が始まるのだが、このドアを開けた鍵と同じ言葉を使うことによって、ハリーがこれから開けてみる金庫の中にも何か素晴らしい光景が広がるのではないかという期待が高まるはずだ。その通りで、金庫を開けてみると、そこには親戚の家で十年間しいたげられながら暮らしてきたハリーには信じられないような魔法界の金貨、銀貨、銅貨の山が待っていた。

ホグワーツ魔法魔術学校でグリフィンドール寮に入ることに決まったハリーは、廊下に飾られている肖像画の中の人物たちがささやいたり生徒を指差したりしていることに気がつく。そしてグリフィンドール寮の入り口にはピンクのドレスを着た太った婦人の肖像画が掛かっていた。

The Gryffindor first-years followed Percy through the chattering crowds, out of the Great Hall and up the marble staircase. Harry's legs were like lead again, but only because he was so tired and full of food. He was too sleepy even to be surprised that the people in the portraits along the corridors whispered and pointed as they passed

At the very end of the corridor hung a portrait of a very fat woman in a pink silk dress.

“Password?” she said.

“*Caput Draconis*,” said Percy, and the portrait swung forward to reveal a round hole in the wall.

Harry Potter and the Philosopher’s Stone,
Chap. 7 “The Sorting Hat” (p. 96)

肖像画の中の人物が生きているというのは、『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass*, 1872) に登場している。アリスが暖炉の上の鏡を抜けて鏡の国に入った時、現実世界から鏡の中に見えた部分はまったく同じなのに、鏡に映っていなかった部分はかなり違うことに驚く。その時に暖炉の横にある肖像画の違いにも気づいている。

For instance, the pictures on the wall next to the fire seemed to be all alive, and the very clock on the chimney-piece (you know you can only see the back of it in the Looking-glass) had got the face of a little old man, and grinned at her.

Through the Looking Glass,
Chap. 1 “Looking-Glass House”⁷⁾

暖炉の上に置かれた時計でさえ、老人の顔をしていてアリスに笑いかけている。『鏡の国のアリス』のこの場面を思い出すならば、ハリーがこれから初めて入ってゆくグリフィンドール寮の中にもたくさんの不思議が隠されているのを期待することになるだろう。

また、最終巻の『ハリー・ポッターと死の秘宝』(*Harry Potter and the Deathly Hallows*, 2007) に登場する秘密の抜け道は、まるで『鏡の国のアリス』にある暖炉の上の鏡とその横にある肖像画が組み合わせられたような仕掛けだ。hogwarts魔法魔術学校校長でハリーの助言者アルバ

ス・ダンブルドア先生は今や故人となっているが、彼の弟アバーフォースが hogwarts の隣村 hogzmiid でパブ「ホッグズ・ヘッド」を営んでおり、ハリー、ロン、ハーマイオニーを間一髪のところまで危機から救ってくれる。三人を招き入れた彼の部屋には暖炉があり、その上には若くして亡くなった妹アリアナの肖像画が掛かっていた。

..... [Aberforth] walked around the little table and approached the portrait of Ariana.

“You know what to do,” he said.

She smiled, turned and walked away, not as people in portraits usually did, out of the sides of their frames, but along what seemed to be a long tunnel painted behind her. They watched her slight figure retreating until finally she was swallowed by the darkness

A tiny white dot had reappeared at the end of the painted tunnel, and now Ariana was walking back towards them, growing bigger and bigger as she came. But there was somebody else with her now, someone taller than she was

Larger and larger the two figures grew, until only their heads and shoulders filled the portrait. Then the whole thing swung forwards on the wall like a little door, and the entrance to a real tunnel was revealed.

Harry Potter and the Deathly Hallows,
Chap. 28 “The Missing Mirror”⁸⁾

アリアナの肖像画は hogwarts 魔法魔術学校とホッグズ・ヘッドを結ぶ秘密の通路の出入り口になっていて、ここは肖像画の中の人物であるアリアナがハリーの仲間を hogwarts から連れて帰って来る場面だ。

『鏡の国のアリス』でも魔法の国に入るための鏡は暖炉の上にある。

“..... Why, it's turning into a sort of mist now, I declare! It'll be easy enough to get through —” She was up on the chimney-piece while she said this, though she hardly knew how she had got there. And certainly the glass *was* beginning to melt away, just like a bright silvery mist.

In another moment Alice was through the glass, and had jumped lightly down into the Looking-glass room.

Through the Looking Glass,

Chap. 1 “Looking-Glass House” (p. 8)

鏡と肖像画の違いはあるが、このふたつの場面には、暖炉の上に掛かっているものが秘密の抜け道になっている、という共通点がある。さらに『ハリー・ポッターと死の秘宝』のこの場面は、ある一對の鏡の秘密も明らかになる部分であり、暖炉、鏡、肖像画の三つが不思議な雰囲気醸し出している。その一對の鏡とは、ハリーの父親の親友でありハリーの名付け親でもある、これも今や故人のシリウス・ブラックが、ハリーとの秘密の連絡手段として遺していった鏡であり、シリウスが持っていた鏡の片割れの現在の持ち主は実はアバーフォースで、ハリーをずっと見守っていたということがわかる場面だ。

また、『ハリー・ポッターと賢者の石』のクライマックス部分には、ハリーと親友のロン、ハーマイオニーの三人が「賢者の石」を守ろうと、禁じられた階にある部屋の仕掛け扉を抜けて行く場面がある。ハリーは仕掛け扉の下にある縦穴を降りて行かなければならない。

Harry climbed over it and looked down through the trap-

door. There was no sign of the bottom.

He lowered himself through the hole until he was hanging on by his fingertips. Then he looked up at Ron and said, “If anything happens to me, don’t follow. Go straight to the owlery and send Hedwig to Dumbledore, right?”

“Right,” said Ron.

“See you in a minute, I hope . . .”

And Harry let go. Cold, damp air rushed past him as he fell down, down, down and —

FLUMP. With a funny, muffled sort of thump he landed on something soft. He sat up and felt around, his eyes not used to the gloom. It felt as though he was sitting on some sort of plant.

Harry Potter and the Philosopher’s Stone,

Chap. 16 “Through the Trapdoor” (p. 201)

「下へ、下へ、下へ」と落下して行き、落下の衝撃は縦穴の底にある植物によってやわらげられるところは、『不思議の国のアリス』でアリスがうさぎ穴を落ちてゆく場面に通じるところがある。

Down, down, down. Would the fall *never* come to an end! “I wonder how many miles I’ve fallen by this time?” she said aloud
.....

Down, down, down. There was nothing else to do, so Alice soon began talking again when suddenly, thump! thump! down she came upon a heap of sticks and dry leaves, and the fall was over.

Alice’s Adventures in Wonderland,

Chap. 1 “Down the Rabbit Hole” (pp. 3-5)

ハリーには落ちている最中にアリスのようにのんびりと色々なことを考えて独り言を言ったりする時間はなかったものの、違う空間へと入って行く時の描写が似ているのはおもしろい。

さらにハリー、ロン、ハーマイオニーの三人が仕掛け扉の下の世界を進んで行くと、ある部屋には巨大なチェス盤が広がっていた。盤の上のチェスの駒は生きている駒で、三人はチェスの黒の駒になって白の駒を負かさなければ先に進めない。

They were standing on the edge of a huge chessboard, behind the black chessmen, which were all taller than they were and carved from what looked like black stone. Facing them, way across the chamber, were the white pieces

“Now what do we do?” Harry whispered.

“It’s obvious, isn’t it?” said Ron. “We’ve got to play our way across the room.”

“How?” said Hermione nervously.

“I think,” said Ron, “we’re going to have to be chessmen.”

He walked up to a black knight and put his hand out to touch the knight’s horse. At once, the stone sprang to life. The horse pawed the ground and the knight turned his helmeted head to look down at Ron.

“Do we — er — have to join you to get across?”

The black knight nodded. Ron turned to the other two

“Well, Harry, you take the place of that bishop, and Hermione, you go next to him instead of that castle.”

“What about you?”

“I’m going to be a knight,” said Ron.

Harry Potter and the Philosopher’s Stone,

Chap. 16 “Through the Trapdoor” (pp. 204-05)

これは『鏡の国のアリス』でアリスが入って行った鏡の国を思わせる一場面だ。鏡のあちら側に足を踏み入れたアリスは、肖像画や時計の現実世界との違いとともに、チェスの駒が生きて動いていることにも気がつく。

“Here are the Red King and the Red Queen,” Alice said (in a whisper, for fear of frightening them), “and there are the White King and the White Queen sitting on the edge of the shovel — and here are two Castles walking arm in arm —”

Through the Looking Glass,

Chap. 1 “Looking-Glass House” (pp. 10-11)

そして赤のクイーンと一緒に丘に登ったアリスは不思議な光景を目にする。野原が見えるはずが、アリスの目の前には小川と生け垣によっていくつもの四角に区切られた土地が広がり、まるでチェス盤のように見えるのだった。

For some minutes Alice stood without speaking, looking out in all directions over the country — and a most curious country it was. There were a number of tiny little brooks running straight across it from side to side, and the ground between was divided up into squares by a number of little green hedges, that

reached from brook to brook.

“I declare it’s marked out just like a large chessboard!”
Alice said at last.

Through the Looking Glass,

Chap. 2 “The Garden of Live Flowers” (p. 27)

この物語の冒頭部分に「白のポーンのアリスが11手で勝つ」(“White Pawn (Alice) to play and win in eleven moves”) とあるように、『鏡の国のアリス』は物語全体がチェスのゲームのように進むという設定で、アリスは白のポーンとしてチェスの世界に足を踏み入れ、鏡の国の冒険の終りには白のクイーンにまでなるのだ。ハリー、ロン、ハーマイオニーの三人がチェス盤でできた部屋に入り込み、チェスの駒として進んで行かなければならないという場面には、『鏡の国のアリス』の記憶が注がれているのではないだろうか。

チェスの部屋の次には、魔法薬の瓶がテーブルの上に並んだ部屋があった。七本の瓶の横には巻紙が置いてあり、そこには謎なぞが書いてある。優等生のハーマイオニーがその謎を解いて、どの魔法薬を飲めばよいかをハリーに教えるが、先に進むための魔法薬は一人分しかなかった。ハーマイオニーは紫の炎があがっているもと来た扉を抜けるための魔法薬を飲んで、チェスに勝つために犠牲になったロンを連れ、ダンブルドア先生に知らせに行く。そしてハリーは黒い炎のあがった扉を通してその先の部屋へと進むことになる。

..... there was nothing very frightening in here, just a table
with seven differently shaped bottles standing on it in a line

“Look!” Hermione seized a roll of paper lying next to the
bottles

“*Brilliant,*” said Hermione. “This isn’t magic — it’s logic — a puzzle

“..... Everything we need is here on this paper. Seven bottles: three are poison; two are wine; one will get us safely through the black fire and one will get us back through the purple.”

Hermione read the paper several times. Then she walked up and down the line of bottles, muttering to herself and pointing at them. At last, she clapped her hands.

“Got it,” she said. “The smallest bottle will get us through the black fire — towards the Stone.”

Harry looked at the tiny bottle

Harry took a deep breath and picked up the smallest bottle. He turned to face the black flames.

“Here I come,” he said and he drained the little bottle in one gulp.

Harry Potter and the Philosopher’s Stone,

Chap. 16 “Through the Trapdoor” (pp. 206-08)

魔法薬がテーブルの上であり、そこに紙に書かれた指示が置いてある。そして魔法薬を飲むことによって扉を通り別の空間に入っていくことができるという設定は、小さな黄金の鍵を見つけたものの、扉が小さすぎて通ることができず、そこに「私をお飲み」と書かれたラベルつきの瓶が現れる、という『不思議の国のアリス』の中の場面を思い起こさずにはいられない。

There seemed to be no use in waiting by the little door, so

she went back to the table, half hoping she might find another key on it this time she found a little bottle on it, (“which certainly was not here before,” said Alice), and round the neck of the bottle was a paper label, with the words “DRINK ME” beautifully printed on it in large letters.

Alice’s Adventures in Wonderland,

Chap. 1 “Down the Rabbit Hole” (p. 7)

『不思議の国のアリス』のこの場面では、ハーマイオニーが解いたような手の込んだ謎なぞが書かれているわけではないが、謎なぞはまた二冊の『アリス』のひとつの特徴でもあることを考えると、ハリーとハーマイオニーが魔法薬を飲むこの場面は二重の意味で『アリス』へのアリュージョンになっていると言ってもいいだろう。

2. 『ピーター・パン』の影

〈ハリー・ポッター〉の物語には、ジェイムズ・M・バリの『ピーター・パン』のいくつかのイメージも投じられている。

第二巻『ハリー・ポッターと秘密の部屋』(*Harry Potter and the Chamber of Secrets*, 1998)の冒頭では、いつものようにダーズリー家で夏休みを過ごさなければならないハリーが、ある事件のために二階の部屋に閉じ込められている。そしてある日の夜、親友のロン・ウィーズリーと彼の双子の兄たちフレッドとジョージが空飛ぶトルコ石色の車で迎えに来てくれる。

..... Ron was leaning out of the back window of an old turquoise car, which was parked *in mid-air*. Grinning at Harry from the front seats were Fred and George, Ron’s elder twin

brothers.

.....

For a split second, Uncle Vernon stood framed in the doorway, then he let out a bellow like an angry bull and dived at Harry, grabbing him by the ankle.

Ron, Fred and George seized Harry's arms and pulled as hard as they could.

"Petunia!" roared Uncle Vernon. "He's getting away! HE'S GETTING AWAY!"

The Weasleys gave a gigantic tug and Harry's leg slid out of Uncle Vernon's grasp "Put your foot down, Fred!" and the car shot suddenly towards the moon.

Harry couldn't believe it — he was free. He wound down the window, the night air whipping his hair, and looked back at the shrinking rooftops of Privet Drive.

Harry Potter and the Chamber of Secrets,
Chap. 3 "The Burrow"⁹⁾

こうしてハリーはウィーズリー兄弟に助けられ、寝室の窓から空飛ぶ車に乗り込み、再び自由の身となった。

『ピーター・パン』では、夜の子ども部屋にピーター・パンが訪れ、ダーリング家のウェンディ、ジョン、マイケルの三人に空の飛び方をおしえて、ネバーランドへ連れて行こうとしている。飛び方は簡単で、妖精の粉をかけてもらい、楽しいことを考えれば体が宙に浮く、というものだった。乳母役のニューファンドランド犬ナナが子ども部屋の様子がおかしいことに気づき、パーティーに出掛けていたダーリング夫妻を連れ帰って来る。しかし時すでに遅く、子どもたちは飛び立ってしまった後だっ

た。

In a tremble they opened the street door. Mr Darling would have rushed upstairs, but Mrs Darling signed to him to go softly
.....

They would have reached the nursery in time had it not been that the little stars were watching them. Once again the stars blew the window open, and that smallest star of all called out:

“Cave, Peter!”

Then Peter knew that there was not a moment to lose. “Come,” he cried imperiously, and soared out at once into the night followed by John and Michael and Wendy.

Mr and Mrs Darling and Nana rushed into the nursery too late. The birds were flown.

Peter Pan, Chap. 3 “Come Away, Come Away!” (pp. 53-54)

寝室の窓から夜の空への脱出、それをとめようとした大人たちは間に合わなかった、という状況がそっくりだ。しかも『ピーター・パン』のこの場面の後には、ピーターが言う「ふたつめの角を右にまがって、朝までまっすぐ」(“Second to the right, and straight on till morning”)という奇妙でしかも夢のあるネバーランドへの行き方と、空を自由に飛び回る子どもたちの喜びが続いている。ウィーズリー家の空飛ぶ車で救い出されたハリーが感じる自由と幸せも、ピーター・パンと一緒に空を飛んで行くダーリング家の子どもたちの興奮につなげて考えることができれば、さらに高まるだろう。

第四巻『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(*Harry Potter and the Goblet of Fire*, 2000) の第七章には、魔法界の人気スポーツであるクィ

ディッチのワールドカップ観戦の場面が登場する。試合会場の近くで、ハリー、ロン、ハーマイオニーはウィーズリー一家とともにキャンプをすることになり、寝泊まりするための小さなテントをいくつか張る。ダーズリー家で暮らした十年間には、キャンプに連れて行ってもらったことなど一度もないハリーにとって、仲間たちとテントを張って野宿するという経験はなんという喜びだろうか。しかしテントはどう見ても、家族と友人たちの合わせて十人が中に入れるようには見えなかった。

..... the trouble was that once Bill, Charlie and Percy arrived, they would be a party of ten. Hermione seemed to have spotted this problem, too; she gave Harry a quizzical look as Mr Weasley dropped to his hands and knees and entered the first tent.

“We’ll be a bit cramped,” he called, “but I think we’ll all squeeze in. Come and have a look.”

Harry bent down, ducked under the tent flap, and felt his jaw drop. He had walked into what looked like an old-fashioned, three-roomed flat, complete with bathroom and kitchen.

Harry Potter and the Goblet of Fire,
Chap. 7 “Bagman and Crouch”¹⁰⁾

半信半疑で入り口をくぐったハリーは、テントの中がバスルームとキッチンつきのアパートの部屋のように広いのに驚く。

『ピーター・パン』のネバーランドでは、ピーターは迷子のロスト・ボーイたちと一緒に大木の根元にある隠れ家で暮らしているのだが、最初にダーリング家の子どもたちがネバーランドにやって来た時には、白い鳥だと思われて矢を射られ、動けなくなってしまったウェンディのために男の子たちは小さな家を建てる。それはウェンディが望む通りの赤い壁

と苔緑の屋根、薔薇の花がのぞく窓のついたとても小さな家で、ドアのノッカーはロスト・ボーイの一人であるトゥートルズの靴のかかと、煙突は弟のジョンがかぶっていたシルクハットという具合だった。シルクハットを屋根の上に置いた途端にそこから煙が出て来るというのも、魔法の国らしくて楽しい。目を覚ましてドアから出て来たウェンディに、男の子たちは「自分たちのお母さんになってほしい」と懇願し、ウェンディはみんなを家の中に招き入れる。

“Very well,” she said, “I will do my best. Come inside at once, you naughty children; I am sure your feet are damp. And before I put you to bed I have just time to finish the story of Cinderella.”

In they went; I don't know how there was room for them but you can squeeze very tight in the Neverland. And that was the first of the many joyous evenings they had with Wendy.

Peter Pan, Chap. 6 “The Little House” (p. 101)

小さな空間に九人の男の子たちが入って行くことができるというこの場面が、『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』の外観からは想像もできないあのテントの内部にハリーが驚くという場面につながってゆく。そうすれば、男の子たちが感じている幸福感とハリーが魔法のテントに感激する気持ちとが二重写しになるのだ。さらに、ウィーズリー一家の家が「隠れ穴」(“The Burrow”)という名で呼ばれているのも、大木の根元にあるピーター・パンの地下の隠れ家を思い起こさせるのではないだろうか。ピーター・パンの隠れ家のこじんまりとした居心地の良さは、ウィーズリー家の「隠れ穴」に大家族が暮らしている温かい心地良さにそっくりだ。ピーター・パンの隠れ家は木がのびてくるたびに部屋の空

間の大きさが変わる、というおもしろさもあり、その点でもハリーたちのテントに通じるところがあるかもしれない。

外観が小さいのに中が大きいという概念は、最終巻『ハリー・ポッターと死の秘宝』でハリー、ロンと三人で旅に出たハーマイオニーが持っている小さなビーズのハンドバッグにも使われている。

“When you say you’ve got the Cloak, and clothes . . .” said Harry, frowning at Hermione, who was carrying nothing except her small beaded handbag, in which she was now rummaging.

“Yes, they’re here,” said Hermione, and to Harry and Ron’s utter astonishment, she pulled out a pair of jeans, a sweatshirt, some maroon socks and, finally, the silvery Invisibility Cloak.

“How the ruddy hell —?”

“Undetectable Extension Charm,” said Hermione. “..... I managed to fit everything we need in here.” She gave the fragile-looking bag a little shake and it echoed like a cargo hold as a number of heavy objects rolled around inside it.

Harry Potter and the Deathly Hallows,
Chap. 9 “A Place to Hide” (p. 135)

「検知不可能拡大呪文」という呪文によってハーマイオニーの小さなビーズのハンドバッグには魔法がかけられ、中には三人の長旅にとって必要なものが全部入っていたのだ。第一巻から第六巻まではホグワーツ魔法魔術学校での場面がほとんどだったが、最終巻第七巻では三人の旅が中心になる。その暮らしの中で、いくらでもものが入るハーマイオニーのハンドバッグが大切な役割を果たすことになる。

3. 〈ナルニア国物語〉の影

『ハリー・ポッターと賢者の石』で、ハリーは魔法の学校へ行くためにキングズ・クロス駅から Hogwarts 特急に乗ることになっている。魔法の国への入り口が駅のプラットホームであるという設定は、C・S・ルイス (C. S. Lewis, 1898-1963) の『カスピアン王子のつのおえ』 (*Prince Caspian*, 1951) でペヴェンシー家の四人兄弟姉妹が現実の世界から再びナルニアの世界へと入って行く場面からヒントを得ているのかもしれない。

キングズ・クロス駅にはたどり着いたものの、ハグリッドからもらった切符には「プラットホーム 9 と 3/4 番線」と書いてあり、そんなプラットホームを見つけれないハリーは途方に暮れる。その時に魔法使いの家族と出会い、9 番線と 10 番線の間にある仕切りに向かってまっすぐにカートを押して行けばいいだけだとおしえてもらう。

He pushed his trolley round and stared at the barrier. It looked very solid. He started to walk towards it. People jostled him on their way to platforms nine and ten. Harry walked more quickly. He was going to smash right into that ticket box and then he'd be in trouble — leaning forward on his trolley he broke into a heavy run — the barrier was coming nearer and nearer — he wouldn't be able to stop — the trolley was out of control — he was a foot away — he closed his eyes ready for the crash —

It didn't come . . . he kept on running . . . he opened his eyes.

A scarlet steam engine was waiting next to a platform packed with people. A sign overhead said *Hogwarts Express, 11 o'clock*. Harry looked behind him and saw a wrought-iron

archway where the ticket box had been, with the words *Platform Nine and Three-Quarters* on it.

Harry Potter and the Philosopher's Stone,

Chap. 6 “The Journey from Platform

Nine and Three Quarters” (pp. 70–71)

目をつぶって仕切りに向かって突進したハリーが目を開けると、そこには人でごった返す9と3/4番プラットホームがあり、その横に Hogワーツ特急と書かれた紅色の蒸気機関車が止まっていた。

『カスピアン王子のつのおえ』では四人の子どもたちは自ら魔法の国へ行こうとはしていない。四人は休暇の後に寄宿学校へ戻る途中、ある田舎町の乗り換え駅のプラットホームでベンチに座り汽車を待っている。その時、急に後ろから何かの力に引っ張られ、気がつくとなルニアの森の中にいたという設定だ。

..... now all four of them were sitting on a seat at a railway station with trunks and playboxes piled up round them. They were, in fact, on their way back to school

It was an empty, sleepy, country station and there was hardly anyone on the platform except themselves. Suddenly Lucy gave a sharp little cry, like someone who has been stung by a wasp.

“What’s up, Lu?” said Edmund — and then suddenly broke off and made a noise like “Ow!”

“What on earth —” began Peter, and then he too suddenly changed what he had been going to say. Instead, he said, “Susan, let go! What are you doing? Where are you dragging

me to?”

“I’m not touching you,” said Susan. “Someone is pulling *me*. Oh — oh — oh — stop it!”

Everyone noticed that all the others’ faces had gone very white.

“I felt just the same,” said Edmund in a breathless voice. “As if I were being dragged along. A most frightful pulling — ough! it’s beginning again.”

“Me too,” said Lucy. “Oh, I can’t bear it.”

“Look sharp!” shouted Edmund. “All catch hands and keep together. This is magic — I can tell by the feeling. Quick!”

“Yes,” said Susan. “Hold hands. Oh, I do wish it would stop — oh!”

Next moment the luggage, the seat, the platform, and the station had completely vanished. The four children, holding hands and panting, found themselves standing in a woody place

.....

Prince Caspian, Chap. 1 “The Island”¹¹⁾

ふたつの作品では状況はかなり違うものの、魔法の国へ足を踏み入れる場所が駅のプラットホームであるという共通点は見逃せない。駅というのは現実世界でも別の場所へ移動するための出発点であるが、そこを魔法の世界への入り口に設定したのは、『カスピアン王子のつのおえ』の冒頭場面が初めてではなかっただろうか。そしてそれを引き継ぐ形で『ハリー・ポッターと賢者の石』のこの印象的な場面があるのだ。巻末で再び子どもたちが現実の駅のプラットホームに帰ってくる、という結末も同じだ。しかし『カスピアン王子のつのおえ』では単にある田舎の乗り

継ぎ駅という設定であるが、〈ハリー・ポッター〉シリーズでは現実に存在するキングズ・クロス駅の中の、現実にはありえない9と3/4番プラットフォームという具体的なイメージのために、さらに想像力がくすぐられ、その点で『カスピアン王子のつのおえ』をはるかに凌いでいると思われる。

第五巻『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』(*Harry Potter and the Order of the Phoenix*, 2003) で初めて登場する「必要の部屋」(“Room of Requirement”)は、〈ハリー・ポッター〉シリーズに繰り返し出てくる「異空間」のひとつであり、それはhogwartsの七階の廊下の壁の前を、どんな部屋がほしいか唱えながら三度歩くと扉が現れるという部屋だ。

We need somewhere to learn to fight . . . he thought. Just give us a place to practise . . . somewhere they can't find us . . .

“Harry!” said Hermione sharply, as they wheeled around after their third walk past.

A highly polished door had appeared in the wall. Ron was staring at it, looking slightly wary. Harry reached out, seized the brass handle, pulled open the door and led the way into a spacious room lit with flickering torches like those that illuminated the dungeons eight floors below.

Harry Potter and the Order of the Phoenix,
Chap. 18 “Dumbledore’s Army”¹²⁾

そしてこの部屋の中に「姿をくらますキャビネット棚」(“Vanishing Cabinet”)という戸棚があり、それは第六巻『ハリー・ポッターと謎のプリンス』(*Harry Potter and the Half-Blood Prince*, 2005) で、外部

の侵入から固く護られているはずの Hogwarts 魔法魔術学校に、敵側の魔法使いたちが忍び込んでくるための抜け道として使われてしまうことになる。ハリーの宿敵であるスリザリン寮生のドラコ・マルフォイに、どのように敵側の魔法使いたちを忍び込ませたのかをダンブルドア先生が問う場面で、その戸棚の秘密が明らかになる。

“..... how did you smuggle them in here? It seems to have taken you a long time to work out how to do it.”

..... “I had to mend that broken Vanishing Cabinet that no one’s used for years”

“Aaaah.”

Dumbledore’s sigh was half a groan. He closed his eyes for a moment.

“That was clever . . . there is a pair, I take it?”

“The other’s in Borgin and Burkes,” said Malfoy, “and they make a kind of passage between them” I was the one who realised there could be a way into Hogwarts through the Cabinets if I fixed the broken one.”

“Very good,” murmured Dumbledore. “So the Death Eaters were able to pass from Borgin and Burkes into the school to help you . . . a clever plan, a very clever plan . . . and, as you say, right under my nose . . .”

Harry Potter and the Half-Blood Prince,

Chap. 27 “The Lightning-Struck Tower”¹³⁾

一対の戸棚がふたつの場所をつなぐ秘密の通路を生み出すという仕掛けで、マルフォイが壊れた方のひとつを修理することによって、ボーギン・

アンド・パークスという店にある片方の戸棚から Hogwarts 魔法魔術学校の「必要の部屋」に置かれたもう片方の戸棚へと空間移動ができるようになったというのだ。

戸棚が空間移動の入り口であるという設定は、C・S・ルイスの『ライオンと魔女』(*The Lion, the Witch and the Wardrobe*, 1950) で衣装だんすが別世界への入り口であることを思い起こさせる。ペヴェンシー家の四人兄弟姉妹が広いお屋敷の中を探検して歩きまわっていた時に、末娘ルーシーがひとつの空き部屋に置いてある大きな衣装だんすに興味を持つ。その中に入り、掛かっている毛皮のコートをかきわけて進んで行くと、雪の降る夜の森につながっていた、というあの有名な場面だ。

“This must be a simply enormous wardrobe!” thought Lucy, going still further in and pushing the soft folds of the coats aside to make room for her. Then she noticed that there was something crunching under her feet. “I wonder is that more moth-balls?” she thought, stooping down to feel it with her hand. But instead of feeling the hard, smooth wood of the floor of the wardrobe, she felt something soft and powdery and extremely cold. “This is very queer,” she said, and went on a step or two further.

Next moment she found that what was rubbing against her face and hands was no longer soft fur but something hard and rough and even prickly. “Why, it is just like branches of trees!” exclaimed Lucy. And then she saw that there was a light ahead of her; not a few inches away where the back of the wardrobe ought to have been, but a long way off. Something cold and soft was falling on her. A moment later she found that she was

standing in the middle of a wood at night-time with snow under her feet and snowflakes falling through the air.

The Lion, the Witch and the Wardrobe,

Chap. 1 “Lucy Looks into a Wardrobe”¹⁴⁾

ふたつの場面では“cabinet”と“wardrobe”という言葉の違いがあるし、『ライオンと魔女』では衣装だんすから直接ナルニアの森への移動で、『ハリー・ポッターと謎のプリンス』でのように戸棚から戸棚への移動ではない。それでも、〈ナルニア国物語〉と〈ハリー・ポッター〉の物語の間に存在する、ものを入れておく家具が別空間へとつながる通路になるという設定の類似は、両方の本を読んだことがある読者にとっては興味をそそられるところだろう¹⁵⁾。

4. 〈指輪物語〉の影

J・R・R・トールキン (J. R. R. Tolkien, 1892-1973) の〈指輪物語〉 (*The Lord of the Rings*, 1954-55) は、小さなイメージから大きなテーマにいたるまで、〈ハリー・ポッター〉シリーズにさまざまな影を落としている作品だ。

『ハリー・ポッターと秘密の部屋』で、ハグリッドの言いつけ通り「禁じられた森」へ蜘蛛の群れを追って行ったハリーとロンは、ハグリッドが育てたという巨大蜘蛛のアラゴグとその子孫たちに遭遇することになる。

Harry didn't even have time to turn around. There was a loud clicking noise and suddenly he felt something long and hairy seize him around the middle and lift him off the ground, so that he was hanging face down. Struggling, terrified, he heard more

clicking, and saw Ron's legs leave the ground too — next moment, he was being swept away into the dark trees.

Head hanging, Harry saw that what had hold of him was marching on six immensely long, hairy legs, the front two clutching him tightly below a pair of shining black pincers. Behind him, he could hear another of the creatures, no doubt carrying Ron

Spiders. Not tiny spiders like those surging over the leaves below. Spiders the size of carthorses, eight-eyed, eight-legged, black, hairy, gigantic

Harry Potter and the Chamber of Secrets,
Chap. 15 “Aragog” (p. 204)

アラゴグは育ての親ハグリッドの仲間であるハリーやロンを殺そうとはしないが、子孫の巨大蜘蛛たちは二人を襲おうとする。そこに森へ逃げ込んでしまっていたウィーズリー家のトルコ石色の車が二人を救いに来てくれる。

巨大蜘蛛が二人を襲うというこの場面は、〈指輪物語〉の第二巻『二つの塔』(*The Two Towers*, 1954) で主人公フロドとその仲間のサムを襲うシェロブという巨大蜘蛛の場面を思わせる¹⁶⁾。

..... A little way ahead and to his left he saw suddenly, issuing from a black hole of shadow under the cliff, the most loathly shape that he had ever beheld, horrible beyond the horror of an evil dream. Most like a spider she was, but huger than the great hunting beasts, and more terrible than they because of the evil purpose in her remorseless eyes Great horns she had, and

behind her short stalk-like neck was her huge swollen body, a vast bloated bag, swaying and sagging between her legs; its great bulk was black, blotched with livid marks, but the belly underneath was pale and luminous and gave forth a stench. Her legs were bent, with great knobbed joints high above her back, and hairs that stuck out like steel spines, and at each leg's end there was a claw.

The Two Towers, Book IV, Chap. 9 “Shelob’s Lair”¹⁷⁾

蜘蛛は蛇と並んで嫌悪をもよおす生きものの代表であるから、ハリーとロンが出くわす巨大蜘蛛たちを直接『二つの塔』に登場するシェロブにつなげなくてもいいのかもしれないが、『二つの塔』のこの場面の直後では、フロドがシェロブの糸に絡めとられ、毒針に刺されて仮死状態になってしまうという流れを重ね合わすならば、この時のハリーとロンが感じているであろう恐怖心を想像することは難しくない。

〈ハリー・ポッター〉シリーズにはルイス・キャロルを思わせるような言葉遊びがちりばめられていて、第三巻『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』(*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, 1999) で初めて登場する「かくれん防止器」(“Sneakoscope”)もそのひとつだ。夏休みでダーズリー一家に戻っているハリーのもとに、ロンから誕生日のプレゼントが届く。それはエジプトへ家族旅行に出掛けているロンが見つけたものだった。

Harry now turned to his present and unwrapped it. Inside was what looked like a miniature glass spinning top. There was another note from Ron beneath it.

Harry — this is a Pocket Sneakoscope. If there's someone untrustworthy around, it's supposed to light up and spin. Bill says it's rubbish sold for wizard tourists and isn't reliable, because it kept lighting up at dinner last night. But he didn't realise Fred and George had put beetles in his soup.

Bye — Ron

Harry put the Pocket Sneakoscope on his bedside table, where it stood quite still, balanced on its point, reflecting the luminous hands of his clock.

Harry Potter and the Prisoner of Azkaban,

Chap. 1 “Owl Post”¹⁸⁾

ガラスでできた小さなコマのようなこの携帯用スニーコスコープは、怪しい人がそばに来ると光を発してくるくる回り、警告を発するのだという。ロンの手紙によると、家族で食卓を囲んでいる時にそれが反応したのは、双子のフレッドとジョージがウィーズリー家の長男ビルのスープにカブトムシをこっそり入れたからだということだが、これは第三巻のクライマックス場面への伏線ともなっている。つまり、ロンがずっと飼っているペットのネズミのスキャバーズは、実は姿を変えて隠れていた敵側の人間だとわかる場面だ。さらに第四巻『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』でも、マッドアイ・ムーディという教師に対してスニーコスコープが反応する場面があり、これも物語の結末部分で、ある人物がムーディに化けていたのだとわかる。最初はさして重要に思えないようなことが、後から重大な意味を帯びてくる。巧みな伏線があちこちに張られているのも〈ハリー・ポッター〉シリーズのひとつの特徴だ。

敵が近づくと光を発して持ち主に迫る危険を知らせるといふ道具は、

〈指輪物語〉の第一巻『旅の仲間』(*The Fellowship of the Ring*, 1954)で“Sting”という名の剣として登場する。このエルフの剣は、もともとは〈指輪物語〉に先立つ『ホビットの冒険』(*The Hobbit or There and Back Again*, 1937)でビルボー・バギンズが巨大蜘蛛との闘いに勝って、感謝の気持ちを込めて名付けた剣だった¹⁹⁾。『旅の仲間』では、エルフの国リベンデルから指輪を捨てる旅に出る甥のフロドにビルボーがこの剣を贈る。

He took from the box a small sword in an old shabby leathern scabbard. Then he drew it, and its polished and well-tended blade glittered suddenly, cold and bright. “This is Sting,” he said, and thrust it with little effort deep into a wooden beam. “Take it, if you like. I shan’t want it again, I expect.”

Frodo accepted it gratefully.

The Fellowship of the Ring, Book II,
Chap. 3 “The Ring Goes South”²⁰⁾

After only a brief rest they started on their way again Behind the dwarf walked Frodo, and he had drawn the short sword, Sting. No gleam came from the blades of Sting or of Glamdring [Gandalf’s sword]; and that was some comfort, for being the work of Elvish smiths in the Elder Days these swords shone with a cold light, if any Orcs were near at hand.

The Fellowship of the Ring, Book II,
Chap. 4 “A Journey in the Dark” (p. 407)

魔法使いガンダルフの持つ“Glamdring”とフロドの持つ“Sting”とい

うエルフの剣は、オークという醜い生きものが近づくと青白く冷たい光を発して、九人の旅の仲間に危険を知らせることになっている。大群で襲ってくるオークは、旅の仲間にとって怖い存在だ。この場面ではまだ剣は光を放ってはいないので、暗闇を歩き続ける旅の仲間たちは安心していているが、後でフロドの“Sting”が光りはじめ、オークが近くまで迫っていることを知らせてくれる。形も違うし敵を刺すことはできないものの、エルフの剣が持つ「敵の接近を知らせる」という役目が、〈ハリー・ポッター〉シリーズのスニークスコープに引き継がれているようだ。

『旅の仲間』には、「森の奥方（“The Lady of Lórien”）」と呼ばれるエルフのガラドリエルが、フロドとサムに「ガラドリエルの鏡」を見せる場面がある。見る者が望む光景を、そして過去、現在、未来の光景を見ることができるというこの水盆は、〈ハリー・ポッター〉シリーズの中のふたつのものに影響をあたえていると思われる。

『ハリー・ポッターと賢者の石』において、クリスマスの夜に、ハリーはある人物のことを調べるために図書館の閲覧禁止の書棚が並んでいる部屋に忍び込む。しかしあやうく見つかかりそうになり、ある部屋に逃げ込むと、そこには彫刻をほどこされた金縁つきの大きな素晴らしい鏡が置いてあった。鏡の前に立ったハリーは、その鏡に映しだされる亡くなったはずの両親や親戚の姿に魅了される。

He had to clap his hands to his mouth to stop himself screaming. He whirled around — for he had seen not only himself in the mirror, but a whole crowd of people standing right behind him.

But the room was empty. Breathing very fast, he turned slowly back to the mirror.

..... Harry was looking at his family, for the first time in his

life.

.....“Now, can you think what the Mirror of Erised shows us all?”

Harry shook his head.

“Let me explain. The happiest man on earth would be able to use the Mirror of Erised like a normal mirror, that is, he would look into it and see himself exactly as he is. Does that help?”

Harry thought. Then he said slowly, “It shows us what we want . . . whatever we want . . .”

“Yes and no,” said Dumbledore quietly. “It shows us nothing more or less than the deepest, most desperate desire of our hearts. You, who have never known your family, see them standing around you”

Harry Potter and the Philosopher's Stone,

Chap. 12 “The Mirror of Erised” (pp. 153, 156-57)

三日目の夜も鏡の中の家族に会うためにハリーがこの部屋を訪れた時に、ダンブルドア先生がやってきて、「みぞの鏡 (“The Mirror of Erised”）」と呼ばれるこの鏡は人の心の奥深くの強い望みを映すものであると、ハリーにおしえる。

また『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』の後半の場面で、ダンブルドア先生の部屋に一人残され、先生が帰ってくるのを待っているハリーは、黒い戸棚から銀色の光がちらちらと出ていることに気づく。戸棚の扉を開けてみると、その光は浅い石の水盆から発せられていることがわかった。

A shallow stone basin lay there, with odd carvings around the edge; runes and symbols that Harry did not recognise. The silvery light was coming from the basin's contents, which were like nothing Harry had ever seen before. He could not tell whether the substance was liquid or gas. It was a bright, whitish silver, and it was moving ceaselessly

He wanted to touch it, to find out what it felt like He therefore pulled his wand out of the inside of his robes, cast a nervous look around the office, looked back at the contents of the basin, and prodded them. The surface of the silvery stuff inside the basin began to swirl very fast.

He bent closer, his head right inside the cabinet. The silvery substance had become transparent; it looked like glass. He looked down into it, expecting to see the stone bottom of the basin — and saw instead an enormous room below the surface of the mysterious substance, a room into which he seemed to be looking through a circular window in the ceiling.

Harry Potter and the Goblet of Fire,
Chap. 30 “The Pensieve” (pp. 506–07)

その水盆の中では液体なのか気体なのかわからない銀色の物質が渦巻いていた。ハリーが魔法の杖でつついてみると、その銀色の物質はさらに渦巻いて透明なガラスのようになった。顔を近づけたハリーは、物質の下には水盆の底が見えるだろうと思ったのだが、そこにはなんと大きな部屋が見え、それはまるで天井に丸く開いた窓から下にある部屋を見下ろしているような感じだった。これは「^{うれ}憂い^{ふるい}の篩」(“The Pensieve”)というもので、それは持ち主の記憶を頭から流し込み、保存しておく仕掛

けであった。そしてこの「^{うれ}憂い^{ふるい}の篩」は、この後に続く第五巻、第六巻、第七巻でハリーが過去の出来事を疑似体験するにあたって、さらに大きな役割を担うようになってゆく。

〈ハリー・ポッター〉シリーズの中のこれらの「みぞの鏡」と「^{うれ}憂い^{ふるい}の篩」は、先に触れた「ガラドリエルの鏡」を源泉にしているようなところがある。ロスロリエンの森でエルフたちのもとに身を寄せた旅の仲間であるが、ある夜フロドとサムの二人が話をしているところに、ガラドリエルが姿を現す。

..... Down a long flight of steps the Lady went into the deep green hollow, through which ran murmuring the silver stream that issued from the fountain on the hill. At the bottom, upon a low pedestal carved like a branching tree, stood a basin of silver, wide and shallow, and beside it stood a silver ewer.

With water from the stream Galadriel filled the basin to the brim, and breathed on it, and when the water was still again she spoke. "Here is the Mirror of Galadriel," she said. "I have brought you here so that you may look in it, if you will."

..... "What shall we look for, and what shall we see?" asked Frodo, filled with awe.

"Many things I can command the Mirror to reveal," she answered, "and to some I can show what they desire to see. But the Mirror will also show things unbidden, and those are often stranger and more profitable than things which we wish to behold. What you will see, if you leave the Mirror free to work, I cannot tell. For it shows things that were, and things that are, and things that yet may be. But which it is that he sees, even the

wisest cannot always tell. Do you wish to look?”

The Fellowship of the Ring, Book II,

Chap. 7 “The Mirror of Galadriel” (pp. 474-75)

ガラドリエルは、丘のふもとにある銀の水盆に泉から流れ出ている小川の水を縁まで注ぎ、この「ガラドリエルの鏡」を見せてあげようとフロドとサムを誘う。そしてこの鏡が何を見せてくれるのかを尋ねられ、「ある人たちにはその人たちが望むことを見せてあげられる」（“to some I can show what they desire to see”）と答えている。「望むことを見せる」というのは、『ハリー・ポッターと賢者の石』に登場する「みぞの鏡」が持つ役割であり、その意味で「みぞの鏡」はこの「ガラドリエルの鏡」の子孫だと言えよう。

装飾をほどこされた浅い「水盆」（“basin”）という形は、『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』に登場する「^{うれ}「^{ふるい}憂いの篩」にそっくりである。しかもこの「ガラドリエルの鏡」は「そうであったこと、そうであること、そして、そうであるかもしれないこと」（“things that were, and things that are, and things that yet may be”）を、つまり過去、現在、未来の光景を見せることもできるのだと言う。「^{うれ}「^{ふるい}憂いの篩」が見せてくれるのは過去の記憶であるから、「そうであったこと」ということになる。このように形の点でも、何を見せてくれるかという点でも、「ガラドリエルの鏡」と「^{うれ}「^{ふるい}憂いの篩」は密接なつながりがある。現代のファンタジーの代表格でもあるような〈指輪物語〉の中の特に神秘的なこの場面との類似によって、〈ハリー・ポッター〉シリーズの中の魔法の道具がさらに謎めいたものになっていることは間違いない。

〈指輪物語〉全体を通じて、旅を続けるフロドが苦しみ続けるのは、指輪を取り返して全世界を支配しようとたくらむ冥王サウロンの燃える目が、その指輪を持っているフロドの行動や心までをも見透かしているよ

うに常に感じていることだ。このフロドの苦しみは、〈ハリー・ポッター〉シリーズの第四巻以降で、闇の魔法使いヴォルデモート卿との精神的なつながりをしだいに自覚してゆくハリーの苦悶の中に、その流れを見いだすことができる。第一巻から全巻を通して、ヴォルデモートの存在を身近に感じると、ハリーの額にある稲妻型の傷が激しく痛むのだが、第四巻以降ではそれよりもさらに鮮明に、まるで自分がヴォルデモートの傍らにいつもいるナギニという大蛇の視点からものを見ているような体験を悪夢の中で何度もする。師であるダンブルドア先生を襲いたいという誘惑にかられることさえあった。このつながりを断ち切るために、ハリーは大嫌いなスネイプ先生のもとで「閉心術」(“Occlumency”)を習うことになる。

また〈指輪物語〉の大きな特徴は、伝統的な「宝探しの旅」ではなく、「宝を捨てる旅」であることだ。フロドの使命は、指輪の誘惑に打ち勝ち、冥王サウロンの手には落ちる前に指輪が作られた山に指輪を捨てに行くことなのだ。〈ハリー・ポッター〉シリーズの中で、その指輪の存在に近いのは、ヴォルデモートが永遠の命を手に入れるため、自分の魂を七つに分断して、体の外にある色々なものにひとつひとつの魂のかけらを守らせているという「分霊箱(“Horcruxes”）」だと思われる。第六巻『ハリー・ポッターと謎のプリンス』後半から第七巻『ハリー・ポッターと死の秘宝』全編にかけて、ハリーに課せられた使命は、この七つの「分霊箱」を見つけて破壊し、ひいてはヴォルデモートの復活をさまたげることなのだ。

悪の力に対して心を閉じること、そして使命は宝を破壊すること。この大きなふたつのテーマが〈指輪物語〉と〈ハリー・ポッター〉シリーズの間にある一番大きなつながりなのかもしれない。

おわりに

〈ハリー・ポッター〉シリーズに複数の投影をみることができる作品を作家ごとに大きく四つに分けて見てきた。そのほかにも小さな投影はいくつもあるだろう。例えば、第二巻『ハリー・ポッターと秘密の部屋』に登場する「暴れ柳」(“Whomping Willow”)は、近寄る者を襲うという点で、L・フランク・ボーム (L. Frank Baum, 1856-1919) の『オズの魔法使い』(The Wizard of Oz, 1900) の第19章でドロシーたちの行く手をはばむ「からみつく木」(“Fighting Tree”)にその萌芽をみることができる²¹⁾。ただし『オズの魔法使い』の中ではこの「からみつく木」にはさして重要な役割はないのだが、第三巻『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』ではもっと奥の深いかたちの役割が「暴れ柳」にあたえられていたことが明らかになる。

また、『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』の冒頭で、ダーズリー家にやって来たバーノンおじさんの姉(あるいは妹)のマージおばさんが、あまりにも両親のことを悪く言うのに耐えきれず、ハリーは風船のように体が膨らみ空中に浮き上がる魔法をマージおばさんにかけてしまう。パメラ・L・トラヴァース (Pamela L. Travers, 1899-1996) の『メアリー・ポピンズ』(Mary Poppins, 1934) の第三章では、バンクス家のジェインとマイケルがメアリー・ポピンズに連れられてウィッグさんの家に遊びに行き、ウィッグさんと子どもたちが大笑いをしているうちに、まるで「笑いのガス」で体が満たされたかのように空中に浮き上がる。天井近くでプカプカ浮かびながら四人でお茶をすることになるのだが、風船のように空中に浮かび上がったマージおばさんの様子はこの場面を思わせるのではないだろうか。もちろん、幸せなことを考えると宙に浮く、というのは『ピーター・パン』にすでに描かれたことだった。『メアリー・ポピンズ』でも『ピーター・パン』でも、どちらもそれは陽気で楽しい場面であることから、それを思い出すことは、『ハリー・ポッター

とアズカバンの囚人』の本当は深刻なこの場面にもある種のおかしさをあたえて、^{コミック・リリーフ}喜劇的息抜きのようなアリュージョンになっているのではないかとも思う。

シリーズが完結してから約一年半が経った2008年12月に、J・K・ローリングが挿絵も描いた『吟遊詩人ビードルの物語』(*The Tales of Beedle the Bard*, 2008) が一般の読者にも読める形で出版された。この本は第七巻『ハリー・ポッターと死の秘宝』の中でハーマイオニーに遺されたダンブルドアの遺品のひとつとして登場する魔法界のおとぎ話集であり、最後に載っている「三人兄弟の物語」(“The Tale of Three Brothers”)が、第七巻の中で謎を解くためのヒントを提供してくれている。魔法界の子どもたちが、マグル(魔法使ではない人間)の子どもたちにはおなじみの『白雪姫と七人の小人』や『シンデレラ』ではなく、このようなおとぎ話を読み聞かせてもらって育ったのだと想像することは楽しい。その違いは、マグルの家庭で育ったハーマイオニーと魔法界で生まれ育ったロンの会話からもうかがえる。

“And as for this book,” said Hermione, “*The Tales of Beedle the Bard* . . . I’ve never even heard of them!”

“You’ve never heard of *The Tales of Beedle the Bard*?” said Ron incredulously. “You’re kidding, right?”

“Ron, you know full well Harry and I were brought up by Muggles!” said Hermione. “We didn’t hear stories like that when we were little, we heard *Snow White and the Seven Dwarves* and *Cinderella* —”

“What’s that, an illness?” asked Ron.

Harry Potter and the Deathly Hallows,

Chap. 7 “The Will of Albus Dumbledore” (pp. 113-14)

ここでも『白雪姫と七人の小人』や『シンデレラ』というタイトルが、ホグワーツ魔法魔術学校に来る前のハーマイオニーは普通の人間の子どもとして育ってきたのだとあらためて思わせてくれる。これも私たちの日常と魔法の物語を結ぶ一種のアリユージョンなのかもしれない。

先行作品へのオマージュやアリユージョンは、それに気がつかなくても物語を読む上での邪魔にはならない。それに気づく時のみ、類似したイメージによって昔の作品と今の作品が時間を越えて照らしあい、物語の世界がより豊かなものになってゆく。そして、平面的にとらえていた物語のプロットに、複数の解釈の可能性が生まれてくる場合もあるのだ。〈ハリー・ポッター〉シリーズにはまだたくさん先行作品からの影が映っているに違いない。それをこれからもひとつずつ拾ってゆきたいと思う。そして、このシリーズが古典として残るならば、続く将来の作品群の中に今度はハリー・ポッターの影を捜してゆければと思っている。

注

- 1) 『影との戦い』ではオジオンという老魔法使いが、〈ハリー・ポッター〉シリーズではダンブルドア先生という老魔法使いが、年若い生徒の助言者として登場する。彼らはアーサー王伝説の中の魔法使いマーリンの存在に近いと言えよう。J・R・R・トールキンの〈指輪物語〉の魔法使いガンダルフもその系譜を引いている。
- 2) James M. Barrie, *Peter Pan* (1911; Puffin Books, 2002), p. 48.
- 3) 〈ハリー・ポッター〉シリーズの日本語タイトルと作中の固有名詞のほとんどは松岡佑子訳による（静山社、1999年～2008年）。
- 4) J. K. Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (Bloomsbury, 1997), p. 30.
- 5) Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland* (1865; Puffin Books, 1994), p. 12.

- 6) これ以降、引用の中の「...」は原典のままの句読点、「.....」は筆者が本文の一部を省略したことをあらわす。
- 7) Lewis Carroll, *Through the Looking-Glass* (1872; Puffin Books, 1994), pp. 9-10.
- 8) J. K. Rowling, *Harry Potter and the Deathly Hallows* (Bloomsbury, 2007), p. 459.
- 9) J. K. Rowling, *Harry Potter and the Chamber of Secrets* (Bloomsbury, 1998), pp. 24, 26.
- 10) J. K. Rowling, *Harry Potter and the Goblet of Fire* (Bloomsbury, 2000), p. 74.
- 11) C. S. Lewis, *Prince Caspian* (1951; Collins, 1998), pp. 13-14.
- 12) J. K. Rowling, *Harry Potter and the Order of the Phoenix* (Bloomsbury, 2003), pp. 345-46.
- 13) J. K. Rowling, *Harry Potter and the Half-Blood Prince* (Bloomsbury, 2005), p. 548.
- 14) C. S. Lewis, *The Lion, the Witch and the Wardrobe* (1950; Collins, 1998), pp. 15-16.
- 15) この「姿をくらますキャビネット棚」が一對で機能するという仕組みは、ハリーとダンブルドア先生の弟アバーフォースをつなぐ一對の鏡のイメージにも重なるところがあり、悪の側と善の側の両方に、ふたつの場所をつなぐ一對の道具がパラレルに置かれているのも興味深い。
- 16) 巨大蜘蛛との闘いの場面は J・R・R・トールキンの『ホビットの冒険』にも登場する。第八章参照。
- 17) J. R. R. Tolkien, *The Two Towers* (1954; HarperCollins, 1999), p. 417.
- 18) J. K. Rowling, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* (Bloomsbury, 1999), p. 13.
- 19) J. R. R. Tolkien, *The Hobbit or There and Back Again* (1937; HarperCollins, 1999), Chap. 8 “Flies and Spiders,” p. 146.
- 20) J. R. R. Tolkien, *The Fellowship of the Ring* (1954; HarperCollins,

1999), p. 364.

- 21) このイメージは、J・R・R・トールキンの〈指輪物語〉に登場する木の姿をして歩き回る「森の牧人」(“Ent”)にもつながっているだろう。